

# 令和7年度島根県立大学人間文化学部

## 3年次編入学試験

### 保育教育学科 小論文問題

#### 【問題】

次の文章は、「批判」という言葉について論じられたものである。筆者の論を踏まえて、これからの社会を生きるうえで必要な「批判する力」について、教育者をめざす立場からあなたが考察したことを、ふさわしい題名をつけて800字以内で論述せよ。

#### 同調の空気のなかで攻撃や非難と化す「批判」

「批判」にあたる欧語、たとえばドイツ語の *Kritik* や英語の *criticism* は、古代ギリシア語の「クリネイン（ふるいにかける、分ける、裁判する）」や、ラテン語の *cernere*, *cret-*（区別する、選り分ける）に由来し、否定的な批判だけではなく、事柄を整理して批評することや評論することといった意味も保持している（シプリー英語語源辞典、独和大辞典 第二版）。

たとえば、哲学者カント（1724-1804）の主著のタイトルである『純粋理性批判（*Kritik der reinen Vernunft*）』は、理性能力のある種の限界をよく吟味して画定する、といった意味であって、「批判」ということで単純な攻撃や非難といったものを指しているわけではない。また、日本語の「批判」も元々は、批評して判断することや、物事を判定・評価すること、よし悪しや可否について論ずることなどを意味していた（日本国語大辞典 第二版）。

しかし、いつの頃からか、「批判」がこの国で常に否定的なニュアンスを帯びるようになったのも確かだ。この言葉をめぐる現在の状況は、その傾向がさらに強まり、極端になった結果だとも解釈できる。

日本の社会は同調圧力が強く、空気を読むことが推奨される風潮が強い、とはよく指摘されるところだが、確かに、批判的検討が必要な場面でも、相互的な「甘え」や「お約束」がその場のコミュニケーションを覆ってしまうケースがあまりに多い。和を少しでも乱す言葉—批判（批評、吟味）的な要素のある言葉—に皆が敏感になり、その場のノリに合わない言葉を発しづらくなるケースだ。（中略）

まして、そうした同調の空気が支配するケースでは、相手の主張に対して明確に否定的な意見や疑問を向けることは強く憚られるようになる。言うなれば、互いにうなずき合う同調的な言葉の空間と、その空間全体に向けられる容赦のない厳しい言葉、その中

間領域が存在しなくなるのだ。この種の状況がコミュニケーションの多くを占めてしまえば、「批判」の言葉はますます刺々しく、敵意をもったものとしてのみ機能するようになる。「批判」が相手への攻撃として捉えられがちな現状には、以上のような背景があるのではないだろうか。

### 「炎上」という言葉ですべてを塗り潰す前に

同調と攻撃の間の中間領域が確保されにくく、「批判」という言葉が本来含んでいた「内容の吟味」、「物事に対する批評や判断」、「良し悪しや可否をめぐる議論と評価」といったものがおろそかになりがちな現状は、「炎上」という言葉の現在の用法にも通じているように思われる。

「炎上」はいま、各種のメディアで発信された誰か（特に有名人や公人）の言動に対して、ネット上で非難や誹謗中傷が殺到することを指す言葉ともなっている。問題は、当該の言動が筋の通ったものや正当なものであろうとも、逆に、筋の通らないものや不当なものであろうとも、どれも等し並みに「炎上」と呼ばれる、ということだ。ある差別を告発する勇気ある発言をターゲットに、差別主義者たちが罵詈雑言を集中させることも「炎上」と呼ばれるし、とても看過できない酷い差別発言に対して、その問題を指摘する真っ当な声が多く寄せられることも、同様に「炎上」と呼ばれる。そして、何であれ炎上してフォロワーが増えて良かった、チャンネルの登録者数やオンラインサロンの会員が増えて良かった、ということも平然と言われたりする。そこでは、火の手の大きさや、それに伴う熱量の多さが、物事の真偽や正否や善悪に取って代わってしまっている。

マスメディアで頻繁に用いられている「賛否の声が上がっている」という類いの常套句も、問題になっている事柄の内容をさしあたり度外視して、熱量の上昇のみに言及できる便利な言葉だ。どちらかの道理に明らかに分がある場合にも、また、賛否どちらかの声の方が圧倒的に優勢である場合にも、「賛否の声が……」と表現しておけば、旗色を鮮明にせず済むし、自分の言葉に責任をもつ必要もなくなる、というわけだ。

「炎上している」とか「賛否の声が上がっている」といった言葉によって物事をひとまとめにしてしまうのではなく、具体的な内容を「批判」する行為が、メディアでもそれ以外の場でも、もっと広範になされる必要がある。そして繰り返すならば、それは必ずしも否定的な行為だとは限らない。賛意を示すのであれ、あるいは難点を指摘するのであれ、人々がともに問題を整理し、吟味し、理解を深め合っている場こそ、本来の意味で「批判」が行われている、建設的な議論の場なのである。

### 批判を実践するために必要なこと

とはいえ、非難や攻撃とは違って、批判は決して簡単な行為ではなく、私自身も日々試行錯誤しているというのが実情だ。どうすれば的を射た批判を展開できるのかという以前に、相手との人間関係がネックになることも多い。というのも、批判をすれば、多

少なかりとも相手の気分を害したり傷つけたりすることは避けられないからである。だとすれば、批判は具体的にどう行うべきだろうか。

批判する際には言い方に気をつける、というのはシンプルだが、しかし、まずもって重要なポイントだろう。たとえ有益な内容の指摘であっても、不必要にきつい言葉や口調で語られては、感情的にとっても受け入れられなくなる。

また、内容という面でまずい批判の典型は、相手の言葉尻だけを捕らえて自分の土俵（自分の専門分野、自分の経験など）に引きずり込み、その土俵上で相手を説き伏せる、というものだ。たとえば、「あなたはいま「無意識に……」と仰ったが、認知科学的には「無意識」とはこれこれこういうものであるから、「無意識」の問題として捉えるのは不適當だ」という風にして切り捨てるだけでは、相手がひどく気分を害するのも当然だ。そして何より、こうしたやりとりでは、問題に対して互いに理解を深め合うことも、別の見方を知ったり新しい見方を生み出したりすることも難しい。

逆に言えば、重要なのは相手の表現を尊重するということだ。具体的には、相手の言葉を十分なかたちで拾い上げ、それがどのような脈絡の下で発せられたのかをきちんと踏まえたうえで応答する、ということが必要だろう。批判を受ける側も、自分の言わんとすることをちゃんと聞いてもらい、それをよく理解してもらったうえで、納得できる問題点を指摘されるのであれば、苦い思いをしたり、多少傷つく部分はあるとしても、感謝する部分の方が多いだろう。（中略）

また、批判を行う側にとっても、相手の言葉によく耳を傾け、それをよく理解しようと努めることは、自分には見えていないものの見方や馴染みのない考え方に触れ、学ぶ機会になる。そしてそれは、問題に対する理解を深め、解決の道を探る大事な手掛かりになりうるのである。

出典：古田徹也『いつもの言葉を哲学する』朝日新聞出版、2021年（一部改変）